

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	慶應義塾大学	拠点番号	E20
申請分野	学際・複合・新領域		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	次世代メディア・知的社会基盤 Next Generation Media and Intelligent Social Infrastructure		
研究分野及びキーワード	〈研究分野:情報学〉(情報ネットワーク)(マルチメディア情報処理)(知識ベース・知識システム)(情報社会学)(社会情報システム)		
専攻等名	政策・メディア研究科 政策・メディア専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 徳田 英幸 教授 他 31名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成16年1月現在）を抜粋

＜本拠点がカバーする学問分野について＞

研究分野としては、情報学であり、特に情報ネットワーク、マルチメディア情報処理、知識ベース・知識システム、メディア・政策学、情報メディア学、情報社会学、社会情報システムなどの領域である。

＜本拠点の特色及びその目的等＞

本拠点の目的は、次世代情報インフラやデジタルメディアの新しい応用を研究開発するとともに、実証実験を通じて、人間、社会、環境、文化、教育、医療などを支える21世紀型知的社会基盤アーキテクチャの確立をめざすことである。情報のデジタルメディア化は、コンテンツだけでなく、それを利用する行為パターンや社会制度自体に大きな影響を与えている。これらを総合的に探究する必要性が増大しているとともに、次世代情報インフラやデジタルメディアの応用とその社会基盤実証実験に関して、理念、方法論、基礎理論、要素技術、応用などの研究を進める意義は非常に大きい。

＜COEを目指すユニーク性＞

本拠点は、ハーバード大学のBarkman Center for Internet and Society、トロント大学のMcLuhan Program、ウィリアム&メアリー大学のReves Center for International Studies、カーネギーメロン大学の計算機科学部、ケンブリッジ大学のコンピュータコミュニケーション研究所などと連携し活動してきているが、特に、ITやデジタルメディア学の研究者と政策科学系の研究者が1つの組織内で協調作業を通して研究開発を推進し、新しい学問的な方法論までを創出している点が国際的にユニークである。

＜本拠点のCOEとしての重要性・発展性＞

本拠点の重要性は、新しいデジタルメディアという視点から統合的、融合的に研究を進め、拠点の事業推進担当者だけでなく、他大学、地方自治体、企業などと連携しながら社会的な規模で基盤実証実験を行う点にあり、情報学、メディア学、社会情報学への大きな貢献が期待できる。また、産学連携の視点からも、新規産業の創出に密接した技術やすでに商業化された遠隔授業システムなどが開発されており、その発展性が期待できる。

＜本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果＞

世界的にもユニークな学際的な情報学やメディア学の研究拠点となるだけでなく、先端的な実証実験システムを持続的に研究開発できるプロジェクトが、大学院カリキュラムと連動している拠点形成を実現できる。また、従来のディシプリン型やインターディシプリン型でもない新しいコラボレーション型の研究形態が今後の学際・複合・新領域における研究開発モデルとして確立される。また、従来のテキストメディアによる研究成果の蓄積でない新しいメディアによる成果の蓄積と発信方法が定着する。

＜背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等＞

ハーバード大学、トロント大学、ワシントン大学などの拠点で、新しいIT技術やインターネットと社会、組織、個人とのかかわりに関する研究が、活発に進められてきている。またMIT、カーネギーメロン大学、ケンブリッジ大学などを筆頭に、新しいネットワークやメディア関連技術が研究開発されてきており、ますますその社会的重要性が増している。一方、国内の大学においても情報学の研究拠点が生まれつつあり、新規産業の創出や学術的成果の社会への還元サイクルを加速させている。

機 関 名	慶應義塾大学	拠点番号	E 2 0
拠点のプログラム名称	次世代メディア・知的社会基盤		

◇ 21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と評価される。

(コメント)

これからの情報化社会の根幹をなす次世代のメディアとその情報基盤を構築するという重要な課題に対して、本研究は着実に進展していると評価される。すなわち、次世代インフラ基盤技術の確立を進め、情報コンテンツと人間とのかかわりを明らかにしつつ、そのための先端的な実証研究を着実に進行させている。

敢えて言えば、情報化社会の実現に向けて、技術の側から何が提供できるのか、また社会は新しい文化として何を求めているのか、などをさらに明らかにし、情報化に伴う影の部分とその過程における障害などにも配慮されたい。